核兵器廃絶の誓いを新たに

聞いたこと、感じたこと

新津市は、平和を願う人たちと手をつなぎ、核兵器を廃絶して世界平和に貢献しようと、一昨年の九月、「非核平和都市」を宣言しました。そして、この非核平和意識の一層の高揚を図るため、原爆被爆地の広島または長崎を訪れ、平和について研修を行う市民の方に、その費用の一部を補助する制度（非核平和研修補助事業）を設けています。

今年度は、特に若い人への戦争体験の伝承という観点から、今年成人式を迎えた男女を対象にこの事業への参加者を募集したところ、全部で八名の応募者がいらっしゃいました。

今号は、これに応募され、抽選によって補助金の交付を受けられて被爆地で研修を積まれた五十嵐純子さん（美幸町三、学生）、高橋茂さん（新町三、学生）、お二人のレポートをご紹介します。

長崎を最後の被爆地に

五十嵐　純子（美幸町三、学生）

八月七日、平和祈念式典を二日後にひかえた長崎のまちには、式典参加者が多く見受けられた。この日、私は、四十二年前の原爆投下時の話を、長崎市から少し離れた友人宅で聞くことになっていた。

「あの日、私は海で泳いどったのですが、急に海の水が熱うなったとですよ。そいで、恐ろしゅうなって家へ駆け込んだわけですわ。市内の方では、下の川橋に死体がつまってしまってね、水が流れんことですよ。みんな、水ば欲しがって川に来たとですがね。もう、原爆の落ったあたりは、百年は草も生えんじゃろと言われとったですよ。市内から避難してくる人を、何人も何人も泊めたとです。今でも、その時泊まった人が訪ねて来っとですよ。」

しかし、近年はそうした被爆者も高齢となり、亡くなられた人が多いとも聞いた。原爆のこととなると五時間も六時間も話し続けたという人が、減ってきているということであった。

八月十日早朝、現在ではすっかり修復された浦上天主堂のミサに参列した後、人影少ない平和公園を訪ねた。前日の祈念式典で飾られた色とりどりの千羽鶴が印象的であった。平和の泉にある石碑には、「のどが乾いてたまりませんでした。水には油のようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとう油の浮いたまま飲みました。」と刻まれており、これには胸がしめつけられるようであった。蝉しぐれの原爆落下中心地では、「四十二年前も、こうして蝉が鳴いている中、この空に原爆が投下されたのだろうか」と、思わず空を見上げたことである。

また、原爆資料が展示されている国際文化会館では、写真集によく載っているものを実際に見ることもできた。十一時二分で止まったままの時計などは実物の方がずっと古ぼけており、あらためて原爆の威力と四十二年の歳月が感じられた。

「平和の泉」前の五十嵐さん

長崎が一望にみわたせる稲佐山に登って見た夜景は美しく、原爆の落ちたあたりにもネオンの輝きを見ることができた。それは、百年は草も生えないとさえ言われた死の街が復興して栄えているあかしであり、自然の偉大さ、長崎に住む人々の熱意を感じさせる光景であった。

今回、新津市民の一人として長崎を訪れることができたことは、私にとって大変意義深いことであった。新潟も原爆投下目標地の一つであったことを考えれば、私たちは平和にもっと関心を持つべきだと思う。

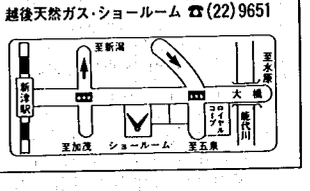
今日、世界に目を向けてみると、次々と核兵器が開発され、核戦略は宇宙にまで広がろうとしている。私は、長崎で見た原爆の傷跡を忘れることなく、平和を求め続けていきたいと思う。長崎は、世界最後の被爆地となるべきなのである。

長崎の平和祈念像

お買物、ご用命は市内で

一日の疲れをいやす、ガス風呂。

越後天然ガス・ショールーム ☎(22)9651



核兵器廃絶

被爆地で見たこと、

核兵器の残忍さを実感

高橋　茂（新町三、学生）

昭和二十年八月九日、天候曇り。この日、長崎に原爆が落とされた。

それから四十二年、今年のこの日は、雨の中で夜が明けた。

平和祈念式典に参加することとなった私の朝は、浦上天主堂での早朝ミサから始まった。朝六時、天主堂へ入るとすでに、信徒の皆さんが席に着いていた。私も後ろの隅へ腰掛ける。

「……爆弾の投下と戦争終結の日が、単に日本の不幸な過去の記憶としてとどまるのみでなく、世界中の人々がこの歴史的教訓を生かして、希望に満ちた社会の建設が出来ますように……」

神父の声が朗々と響く。

昭和二十年八月、アメリカ陸軍省参謀本部から、「八月三日以降、天候の許す限りの早い時期に、広島・新潟・長崎・小倉のうちの一目標に最初の特殊爆弾を投下すべし」との命令が下され、八月六日午前八時十五分、広島へ最初の原爆が投下された。十四万人が死亡。そして、九日午前十一時二分、長崎へ二発目が落ちる。死者七万名。

それまで隠れキリシタンの町として浦上は有名であった。爆心地から五百メートルの所にあった東洋随一の教会といわれた浦上天主堂も、信徒一万四千人を数えた。それが爆発の次の瞬間、爆風によって無残にも崩れ落ち、鐘楼のアンゼラスの鐘のみが奇跡的に残る。この鐘は平和の鐘と呼ばれ、毎年八月九日十一時二分になると鳴らされる。

「……全能の神である父よ、御子イエズスを信じる私たちが……」

『風が吹くとき』という映画がある。私は新潟へ帰って来てから見たのであるが、その淡々と進んでいくアニメーションの随所で長崎が思い出された。イギリスで作られたこれ（原題When The Wind Blows）は、押しつけがましい理屈ではなく、ユーモラスなイメージによって展開していく。この映画の主人公は、年金暮らしをしているジムとヒルダという老夫婦であるが、私は、式典で彼らのようなお年寄りと大勢出会うことができた。

そのお年寄りたちの話によると、長崎には被爆者のための老人ホームがあるという。被爆者の高齢化が進んでいるのだ。しかし、彼らの口調に不思議と大げさな悲愴感はない。あるのは寂しさだけであった。

『風が吹くとき』の最後で、自分自身も長崎で親戚を失ったジミー・T・ムラカミ監督は、死にゆく老夫婦に祈りを捧げさせる。

「……主はわれをみどりの野にふさせ、いこいの水浜にともなう給う。…たとえわれ死の陰の谷をあゆむとも…」

私は、いままで知識として核について知っていた。しかし、実際に現地へ行き、被爆者の方々と会ってみて初めて核の悲惨さを知ることができたと思う。このような貴重な経験をさせてくださった新津市と、長崎、広島で至らない私を助けてくれた人々に感謝の意を表して、このレポートを終わりとしたい。

広島平和公園「慰霊碑」前の高橋さん

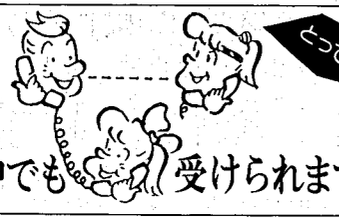
非核平和都市宣言

私たちは　私たちの新津を
緑豊かなまちに
文化の香り高いまちに
そして　お年寄りと子供が大切にされる
あたたかいまちにしたいと願っています
この願いは
一瞬にして生きとし生けるものの生命を奪い
あらゆるものを破壊しつくす核兵器とは
決して共存できません
私たちは
平和を願うすべての国の人々と手をつなぎ
核兵器の完全廃絶を強く訴えます
美しい未来と平和を　子供たちに伝えることが
私たちの責務と確信するゆえに
私たちは　ここに平和への誓いを新たにし
非核平和都市を宣言します

1985年9月

新津市

お買物、ご用命は市内で



とっても便利な　キャッチホン

●ご使用料金 毎月 350円（電話機はそのままで、工事費はかかりません。）

お話し中でも受けられます。　NTT 新津電報電話局 TEL 24−0000